



# つわぶき LETTER

— 島根県立大学出雲キャンパス健康だより —

「コロナ禍の中で」

川跡地区の皆さまへ

この度、県立大学出雲キャンパスのご協力で「健康だより」をシリーズ連載することになりました。地域貢献の一環として快くご協力いただきました。専門情報をぜひご一読ください。

日頃から、島根県立大学出雲キャンパスの様々な学生活動などにご協力いただきありがとうございます。さらに、6月には新型コロナウイルス感染症(coronavirus disease 2019; COVID-19)の感染拡大の影響で、外出を自粛し学修に励む出雲キャンパス学生に向けて、川跡コミュニティセンター様のお声がけにより、川跡地区にお住いの皆さまより食料品等の支援物資を提供していただきました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。また、今回の COVID-19 流行の早期より、感染予防基本マニュアルや行動指針を定め、オンライン授業や学生への新しい生活様式の指導、教員のテレワーク導入など、様々な感染予防対策を講じてきてはいましたが、7月14日に本キャンパスより COVID-19 が発生しました。川跡地区をはじめ、近隣の住民の方々に信頼を大きく損ね、多大なご迷惑をおかけいたしておりますことを、心からお詫び申し上げます。今後は、その信頼を回復すべく、出雲キャンパス一丸となり教育・研究・地域貢献に邁進していく所存でございます。どうぞ皆さまのご理解を賜りますよう、お願い申し上げます。

この度、川跡コミュニティセンター様より新型コロナウイルスに関する内容で出雲キャンパスに寄稿のご依頼をいただきましたので、保健管理センターとして学生・教職員に日々発信している内容をまとめ、さらに最新情報を加えて書かせていただきます。

2019年12月に中国湖北省武漢市で発生した COVID-19 は、グローバル化による人やモノの大移動によって、世界的に拡散しました。COVID-19 は多くの感染者が無症候・軽症のため、感染した人は入院もせず動き回ることができるので、新型コロナウイルスは容易に他の人に拡がります。そのため、すべての感染連鎖を見つけることはほぼ不可能で、このウイルスは生き残ることができています。したがって、症状もでない不顕性感染者がかなり存在していると考えられます。COVID-19 の無症候性感染者について報告した16件のコホート研究を解析した結果、無症候性感染者は感染者全体の40~45%に上り、感染拡大に重大な影響を及ぼしている可能性が示唆されました。本当に今回の新型コロナウイルスはずる賢いです。COVID-19 の約40%は無症候性感染者からうつされたものと推計されます。そして、PCR検査陽性者は COVID-19 患者の氷山の一角だと捉えた方が無難です。

現在、感染が全国的に広がりつつある状況ですが、その特徴は明らかです。主に首都圏のホストクラブなど夜の繁華街、飲食店、カラオケ店、劇場、職場、家庭内などのクラスター感染した人が、仕事、観光、帰省などで地方に行き、そこで、会食などをして地方の人に感染させて地方に拡大しています。また、地方の人が首都圏に行き、不顕性感染者が多数存在している首都圏で感染して、その人が地元に戻り、会食、職場、家庭内などで感染を広げています。したがって、感染が拡大している地域に行かない、感染拡大地域からやってきた人と接触しないことが、最大の感染防止策だと思われれます。つまり、身体的距離(フィジカルディスタンス)の確保、移動制限の実施はとも有効であるとされています。

なぜ、世界中に COVID-19 が拡大したのか? 発生源についてはいろいろありますが、最初に大量発生したのは中国の武漢でした。これが30年前の人の移動であれば、世界中にこれほど早く拡がることはなかったと思います。当時は武漢との直行便はなかったですし、極論を言うと、武漢の風土病・「武漢肺炎」として終わっていた可能性も高いと思います。しかし、現在は多くの人が世界中で動き回っているため、どこかでウイルスが発生すると、あっという間に世界中に拡がるということが今回わかりました。つまり、この30年間、世界を席卷してきたグローバル資本主義によるものだと思われれます。さらに、グローバル資本主義が大都市一極集中を促進しました。そのため、COVID-19 の大部分は、3密の塊である大都市で発生しました。あまりに人口を集中させ過ぎたことが、被害を拡大させています。COVID-19 は行き過ぎたグローバル資本主義の見直しを示唆しているように思われれます。

インド建国の父であるマハトマ・ガンディーは、自由貿易や近代工業化に反対し、貧困や格差をなくすための策を考え抜いた末に、たどり着いたのが「隣人の原理」つまり「近くの人を助けること」でした。「大規模な工場を誘致しても、その工場で働く人しか貧困を脱することができない。また、勤労者の主体性は失われる。それよりも近所の人々が作った農産物を食べ、近所の人々が作った服を着て、近所の人々が建てた家に住む。地産地消で小さな経済単位を無数につくって行く。」そんな考え方でした。格差が極限まで拡大し、地球環境の破壊が進む今こそ、地方回帰に立ち返って、住民同士が支え合う街づくりを考えていかなければならないのではないかと、コロナ禍の中で思っています。



島根県立大学マスコットキャラクター「オロリン」

島根県立大学保健管理センター  
センター長・秦 幸吉、保健師・福島 加菜美  
(2020年9月16日記)